

S.R. ランガナタンの足跡を辿って：生誕地から終焉の地までの図書館を中心に

著者	吉植 庄栄
雑誌名	東北大学附属図書館調査研究室年報
号	5
ページ	115-129
発行年	2018-03-22
URL	http://hdl.handle.net/10097/00122454

S.R. ランガナタンの足跡を辿って： 生誕地から終焉の地までの図書館を中心に

吉植 庄栄¹

1. はじめに

筆者は宮城教育大学附属図書館に在職中、平成24(2012)年度国立大学図書館協会の海外派遣事業に採択され、インド共和国の訪問調査を行った。主に調査を行った点は、IT 大国と言われるインドの高等教育を支える図書館は、一体どのような状態であるかについて調べる事であった。当調査については、拙稿²をはじめとして様々な媒体に報告を行った。

しかし、その際に旅程上断念せざるを得ず、唯一訪問をすることができなかった街が、チェンナイ（旧名マドラス）である。『図書館学の五法則 (The Five Laws of Library Science)』（以下、五法則）³で世界的に有名な、S.R. ランガナタン (Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972) が図書館員になり、多くの著作を書き成果を上げ

たのが、このチェンナイにあるマドラス大学図書館であった。

今回、幸いにもランガナタン生誕 125 周年記念国際学会に招待講演の依頼を頂いた筆者は、この機会にランガナタンが活躍したチェンナイを中心に、彼の生誕地・育った街であるタミルナドゥ州中央部や、終焉の地であるカルナータカ州ベンガルールの調査をあわせて行った（平成 29 年 10 月 21 日～11 月 1 日）。本稿は当調査について、筆者が参加し発表を行った国際学会及び訪問した図書館を中心に報告するものである。なお当調査は、「平成 29 年度東北大学附属図書館における研究振興プログラム」に採択されたものである。

2. 旅程の概要

旅程は以下の通りである。

(1) タミルナドゥ州チェンナイ (Tamilnadu, Chennai)

ランガナタンはここチェンナイで、大学時代を過ごし、数学の教員となった。その後、図書館で働きはじめ、50 代前半までその職にあった。

ここチェンナイでの筆者の活動は、主に以下の通りである。

○知識組織化・図書館・情報管理国際学会「ランガナタン再考」(International Conference on Knowledge Organization, Library and Information Management: Revisiting Ranganathan: SRR@125) への参加・登壇

○チェンナイの図書館調査

- ・インド工科大学マドラス校中央図書館 (Indian Institute of Technology Madras Central Library)
- ・マドラス大学図書館 (Madras University Library)
- ・ロージャ・ムティア研究図書館 (Raja Muthiah Research Library)
- ・コネマラ公共図書館 (Connemara Public Library) 新館・旧館
- ・アナ・センテナリ図書館 (Anna Centenary Library)

(2) タミルナドゥ州中央部

ランガナタンは、チェンナイの南、タミルナドゥ州中央部のジルガリ (Sirkazhi 旧名：シヤリ Shiyali) で生ま

1 東北大学附属図書館情報サービス課参考調査係長

2 拙稿、IT 大国インドにおける学術情報流通の最新事情、大学図書館研究, 98, 2013, p.63-74. を代表として、様々な報告を作成した。以下ウェブサイトに関連業績リストが掲載されている。
<http://www.janul.jp/j/operations/overseas/result.html#H24-2>, (参照 2017-12-10).

れ幼少期をそこで過ごした。生誕地の近隣には、ランガナタンに影響を与えたヒンドゥー教の思想家であるシュリ・オーロビンド (Sri Aurobindo Ghose, 1872-1950) が活動拠点としたポンディシェリ (Puducherry), 世界的に有名な夭逝した天才数学者シュリニヴァサ・ラマヌジャン (Srinivasa Aiyangar Ramanujan, 1887-1920) の故郷であるクンバコナム (Kumbakonam) がある。

この地域では、以下の都市を訪問した。

- ジルガリ (ランガナタンの生誕地)
- ポンディシェリ (ランガナタンに影響を与えたシュリ・オーロビンドゆかりの組織)
- ・シュリ・オーロビンド・アシュラム (Sri Aurobindo Ashram)
- ・オーロヴィル (Auroville)
- クンバコナム (ランガナタンに影響を与えたシュリニヴァサ・ラマヌジャンゆかりの組織)
- ・サストラ大学シュリニヴァサ・ラマヌジャン・センター (Sastra Deemed University SRC Centre)
- この地域の高等教育機関の図書館の調査

- ・サストラ大学シュリニヴァサ・ラマヌジャン・センター Dr.S. Radhakrishnan 図書館 (Sastra Deemed University SRC Centre, Dr.S. Radhakrishnan Library)
- ・サストラ大学 Saraswathi Sadan 中央図書館 (Sastra Deemed University Central Library)

(3) カルナータカ州ベンガルール (Karnataka, Bengaluru)

ランガナタンは晩年、このベンガルールに居を定め拠点とした。この都市では主に以下の調査をした。

- ランガナタンにゆかりがある組織の調査
- ・サラダ＝ランガナタン図書館学基金 (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, Bangalore)
- この地域の高等教育機関の図書館の調査
- ・インド経営大学院大学バンガロール校中央図書館 (Indian Institute of Management Bangalore, Central Library)

なお次ページに、訪問地を地図³で示す。

3 Google Map. (accessed: 2018-1-06).



図1. 訪問地（インド全図）

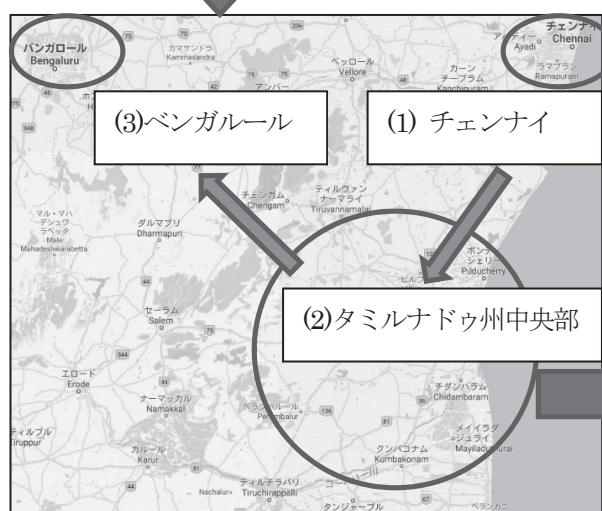


図2. 訪問地（南インド）拡大図

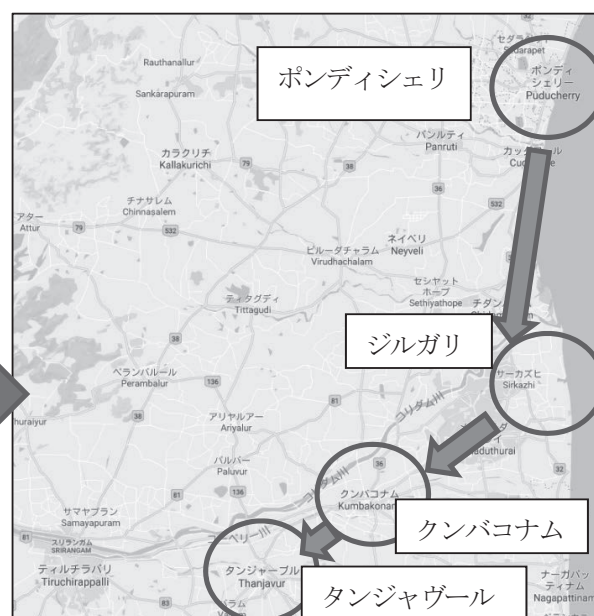


図3. 訪問地(2) タミルナドゥ州中央部 拡大図

3. 国際学会

3.1 知識組織化・図書館・情報管理国際学会「ランガナタン再考」(International Conference on Knowledge Organization, Library and Information Management: Revisiting Ranganathan: SRR@125)

当国際学会は、ランガナタンの生誕 125 年を記念して、チェンナイにあるインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras, Chennai) を会場に平成 29 年 10 月 23 日 (月)～25 日 (水) の期間で開催された。主催は、サラダ＝ランガナタン図書館学基金 (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science)、インド工科大学マドラス校、インフォマティクス・インディア (Informatics India Ltd., Bangalore)、ランガナタン情報学センター (Ranganathan Centre for Information Studies, Chennai) の 4 者共催である。21 日の大部分は、シンガポールに拠点を置く知識組織化国際協会 (International Society for Knowledge Organization) 主催によるプレ・セミナーである IKO2017 がセットで開催された。この IKO の関係者も当学会の最後まで参加していた。

この学会には、図書館員を中心に情報学や数学の研究者や、関連企業から多くの参加者が居たほか、マドラス大学 (University of Madras) 等で図書館情報学を専攻する学生も多く参加していた。インド人の参加者が多い中、アメリカやイギリス、ドイツ、そしてシンガポールといった諸外国からの参加者も居た。加えて、ランガナタンのご令孫であり現在はドイツで活躍するランガナタン・グレゴール・ヨーガシュワリ氏 (Ranganathan Gregoire Yogeshwar, 1959-) をはじめとする、ランガナタンの子孫や一族も列席していた。

会場運営は、会場校であるインド工科大学マドラス校中央図書館をはじめ、近隣のアナ大学 (Anna University) やマドラス大学の図書館員、そして大学生がスタッフとして働いていた。

3 日間に渡る学会の構成であるが、初日は先述した IKO のプレセッションが夕方まで続き、その後開会式及びランガナタンの生涯を振り返る映画上映が行われた。2 日目から 3 日目にかけては、3 つのテクニカル・セッション、2 つのパネルディスカッション (“Public Libraries – India Vision 2022” と “Academic and Research Libraries – India Vision 2022”), そして Memorial Lecture と Interactive Session で構成され、総勢 24 名の登壇者がそれぞれの発表を行った。最後は、閉会式で終了した。



写真1 会場入口

3.2 発表内容

筆者の発表の概要については、本冊子に “Transformation of academic libraries through higher education reform in Japan: becoming realized what Dr. S. R. Ranganathan would want to see” というタイトルで所収されているので、そちらを参照されたい。



写真2 発表する筆者

大まかな内容を示すと、日本の高等教育改革を教育史の大きな流れで考え、それを踏まえて日本の大学図書館が、アクティブラーニング施設を導入しながら変革されていったことを紹介した。その一例として東北大学附属図書館本館について、そのリニューアル内容を中心に紹介した。その際に、当館のプロモーションビデオ (留学生コンシェルジュ Davide Bitti 氏作成) を上映した。最後に結論として、現在の日本の大学図書

館では、ランガナタンが夢描いたことが、実際に実現しつつあるのではないかという持論を、当館を一例に挙げて展開した。

発表中、数度大きなレスポンスやどよめき、拍手を参加者から頂くことができ、終了後質問や感想を述べに来る参加者が少なからず居たほか、その後、ほかのセッションの登壇者2名から、筆者の発表に対して言及を頂くなど、様々な反応を得たので、概ね成功であったと感じている。

3.3 他の登壇者・プログラム

(1) 科学ジャーナリスト Ranganathan Gregoire Yogeshwar 氏

氏は、ランガナタン博士の一人息子である Yogeshwar 氏を父に、ルクセンブルク人の母を持つ、ランガナタン博士の孫である。かつては CERN 等で勤務する科学者であったが、現在はドイツで活躍する科学ジャーナリストであり、ベストセラー作家でもある。

初日の開会式と「ランガナタン博士と近い人々によるインタラクティブ・セッション」に登壇した。



写真3 筆者(左)と Ranganathan Gregoire Yogeshwar 氏(中央)、右はマドラス大学図書館情報学部学生の Romio Moirangthem 氏(マニプリ州インパール出身)

(2) ワシントン大学 Joseph T. Tennis 博士 “Through Formal Analysis and Theories of Meaning: Extending the Trajectory of S.R. Ranganathan’s Theoretical Frameworks in Classification Research”

Tennis 博士は、アメリカ合衆国シアトルにあるワシントン大学の i-School の学務総務を担当する副学部長である。ランガナタンの分類理論の研究及び分類理論の発展についての講演を、当会の最も山場である “Memorial Lecture” にて行った。

(3) ケルン公共図書館館長 Hannelore Vogt 博士

公共図書館のパネルディスカッション (Public Libraries – India Vision 2022) での登壇者で、ケルンの公共図書館での活動を中心に、報告があった。欧州の公共図書館の最新動向の一つとして、メイカースペースの館内設置を挙げていたこと等が、印象深かった。

(4) ノースカロライナ州立大学図書館 Mohan Ramaswamy 博士

大学図書館のパネルディスカッション (Academic and Research Libraries – India Vision 2022) での登壇者で、ノースカロライナ州立大学図書館が、当館と同じくアクティブラーニングスペースを導入して、大きく変わり充実していった軌跡についての報告を行った。分野を超えた研究や学習が求められる現代では、図書館がその場所となることを求められており、従来の蔵書のみならず、ICT メディアや利用者が心地よく使えるワークスペースの提供をしなければならない、という主張が非常に印象深かった。紹介されたノースカロライナ州立大学図書館は、当館施設と比較してスタジオ等 ICT メディアといった機器が一層充実しており、一步以上先に行っているように感じられた。

4. ランガナタンの事跡を訪ねて

4.1. 図書館

(1) コネマラ公共図書館 (Connemara Public Library) (旧館) (チェンナイ)

コネマラ公共図書館は、1896 年、英領インド帝国マドラス総督でコネマラ男爵 Robert Bourke(1827-1902) の 1890 年のプランに従い建設された、無料で利用できる

公共図書館である。ヴィクトリア朝時代の壮麗な建物で、現在もそのまま活用されている。蔵書は英国植民地時代から引き継ぐ典籍類が中心である。

この旧館へは、新館から入館後、2 階の連絡回廊を伝って入館する。通常は入口が出納窓口で、利用者はそこで職員に旧館内資料の出納をオーダーする。同じく入

口には小さな閲覧スペースがあり、そこで利用者は出納された図書を読むようになっている。



写真4 コネマラ公共図書館(旧館)

ランガナタンが1924年にマドラス大学の図書館員になった時には、まだマドラス大学の図書館は完成しておらず、この公共図書館の一画に仮住まいしていた(1907-1936)。またこの地位に就任する以前の学生時代や数学教員時代から、ランガナタンは当館を利用していた。著書の中で、当館の利用しにくさについて語っている箇所もある。⁴

大変優雅で品位の高い建物であり、閉架書庫扱いになっているものの、現在も現役の図書館である。家具や調度品、図書館用具も当時のものと思われるものが多く残っており、また18-19世紀のレアコレクションを展示するなど、どちらも風格があった。しかし高温多湿の風土のため、資料や建物の劣化具合は、非常に進んでいるようにも見えた。

(2) マドラス大学図書館 (Madras University Library) (チェンナイ)

マドラス大学は、1857年に創立した英領インド帝国時代からの歴史ある大学である。英国式大学の典型で、多数のカレッジを抱える。現在は、タミルナドゥ州の州立大学の位置づけである。



写真5 マドラス大学中央図書館閲覧室

インド洋に面する Chepauk Campus 地区に位置するこの図書館は、ランガナタンが在職中の1936年に新館として建てられたもので、煉瓦造りの欧風建築である。天井は非常に高く、閲覧スペースも余裕あるつくりであった。館内には、雑誌閲覧室やPCコーナー、そしてレファレンスコーナーやレファレンス・デスクも備えており、蔵書資料数は図書が約52万6千冊、学位論文が約1万冊、雑誌タイトル数が260である。

ランガナタンは、この図書館が新築された1936年から1945年にヴァラナシのヒンドゥー大学に移るまでの9年間、蔵書の充実、コロソ分類法の開発と実践、開架式書架の運営やレファレンス・サービスの導入といった当図書館の充実に尽力した。

マドラス大学図書館に在職中(1924～1945)を通して見るとランガナタンは、『五法則』(1933)をはじめとする、多数の名著を残した。そしてマドラス図書館協会(Madras Library Association: MLA)の事務局長に就任してその発展に尽力し、その協会活動の一環で1929年に図書館員養成のサマースクールを開講した。その講座が、1937年にはマドラス大学の図書館学講座へと発展した。

また、図書館法の制定運動にも尽力し、1948年にマドラス公共図書館法(Madras Public Library Act)の施行へと繋がる。以上のような様々な図書館活動に、マドラス大学図書館時代のランガナタンは、没入したのである。

閲覧室奥には、ランガナタンの功績を讃えて肖像画が高く掲げられていたのが印象深かった。

4 S.R. Ranganathan, *Reference Service*, 2nd.ed. Asia Publishing House, 1961, p. 26.



写真6 ランガナタンの肖像

写真8 学校図書館に掲げられたランガナタンの胸像
眼鏡をかけていないのは珍しい

(3) S.M. ヒンドゥー・ハイヤー・セカンダリースクール 図書館 (S.M. Hindu Higher Secondary School Library) (ジルガリ)

S.M. ヒンドゥー・ハイヤー・セカンダリースクールとは、ランガナタンが卒業した生誕地ジルガリの学校である。ジルガリは旧名をシヤリ (Shiyali) といい、ランガナタンの名前の一部にもなっている。ランガナタンはこの学校を卒業後、大都市チェンナイの高等教育機関に進学し、郷里を後にする。

写真7 S.M. ヒンドゥー・ハイヤー・セカンダリースクール
A. Varadharajan 校長 (左) と筆者 (右)

当校の学校図書館は、ランガナタンの名を冠したもので、入口にランガナタンの胸像を飾っている。この胸像と下部のプレートは、1999年にこの建物が開館した際の記念であるとのことである。

この学校図書館は校舎とは別棟にあり、通常は施錠されているようで、訪問時には特別に中を見せて頂いた。イギリス統治時代の資料など、中等教育の学校にしては古い資料を所蔵しているものの、学校の教育課程と連動している様子は特に無かった。

なお校内を案内してくれた A. Varadharajan 校長によると、1999年当時には存在していたランガナタンの生家と出身校の旧校舎は取り壊されてしまった、とのことであった。特に生家は、かつての所在地も今では誰も分からないと述懐していた。これは、躍進するインドの高度経済成長による急速な都市化が原因で、街なみがここ数十年で一変してしまったためであるとの説明を受けた。インドの大躍進の影響が、この地方都市にまで波及していることがよく分かる。

(4) サラダ＝ランガナタン図書館学基金 (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, Bangalore) (バンガロール)

5年前の訪印の際に訪問した、このサラダ＝ランガナタン図書館学基金であるが、永らく事務局長の任にあった K.N. Prasad が退任し、代替わりをしたので再度の訪問を計画した。しかし財政状況がひっ迫し、前回訪問した拠点は引き払ったとのことであり、訪問を断念した。

なお基金としての活動は継続しており、引き続き学術誌 SRELS Journal of Information Management の刊行を行うほか、前述した SRR@125 のような学術イベントの主宰も継続している。

4.2 オーロビンドに関わる施設

シュリ・オーロビンド・ゴーシュは1872年、英領インド帝国のカルカッタ（現コルカタ）に誕生した。イギリスで教育を受けたが次第に反英闘争に身を投じる。投獄を経てから、ヒンドゥー教の思想家に転じて行った。

その後、イギリスの官憲の手を逃れる為もあり、フランス植民地であるポンディシェリに拠点を構えた。1950年に没するまで多くの著作を残した彼は、近代ヒンドゥー思想家の泰斗とされている。

(1) ランガナタンとオーロビンドの関わり

ランガナタンはオーロビンドに強く影響を受けていたようで、数々の著作にオーロビンドからの引用がある。*Reference Service* (1940-1941) の初版には、オーロビンドの著作 *The Mother* (1928) からの引用があり⁵、それに対する謝辞⁶もある。当該書の改版後もこの箇所は削除されず、継承されている。

また *Classification and Communication* (1953) では、全人類の学術情報コミュニケーションが深化すると、オーロビンドの描いた理想である“Supra Mental”という境地に全人類が至る⁷、と説明し、やはりランガナタンの描く究極の目標にオーロビンドは大きな影響を与えていたようである。

(2) シュリ・オーロビンド・アシュラム (Sri Aurobindo Ashram) (ポンディシェリ)

シュリ・オーロビンド・アシュラムは、オーロビンドが後半生を過ごしたポンディシェリにある修行施設兼教団本部である。オーロビンドと彼の随伴者であったマザー (Mirra Alfassa, 1878-1973) の墓所でもあり、二人を慕う多くの人々が礼拝に訪れる。

当所の内部は撮影禁止で、靴を預けて裸足で見学せねばならなかった。中では墓所をはじめ、オーロビンドとマザーの著作の販売所と図書室を見学した。英語やインド諸語、そしてドイツ語、フランス語やロシア語といったヨーロッパ語訳の著作が販売されており、買い求める人が多く居た。図書室にも著作が多く置かれ、管理人の様な図書館員が1人居た。



写真9 シュリ・オーロビンド・アシュラムの玄関

(3) オーロヴィル (Auroville) (ポンディシェリ)

オーロヴィルとは、ポンディシェリ近郊、タミルナドゥ州ヴィルップラム (Viluppuram) にある人工都市である。オーロビンドの思想に基づきマザーが、1968年に創立した。世界各国の人々が人種を超えて、お金を使わず共同生活を行うという街であり、20平方キロメートルという広大な敷地内に、54か国2,814人⁸(2018年1月3日現在)と世界中から人が集まり住んでいる。日本人も14人住んでいる。



写真10 マトゥリマンディル

居住者になるには数々の条件を満たさねばならないが、一時的な滞在や見学は可能である。ここではビジターセンターと、街の中心部にあって、人工都市の中心核と位置づけられているマトゥリマンディル (Matrimandir) という瞑想施設を外側から見学した。そのほか、この街の公共図書館の中央館であるオーロヴィル図書館 (Auroville Library) を見学した。

5 S.R. Ranganathan, K.M. Sivaraman, C. Sundaram, *Reference Service and Bibliography with a foreword by Sir Maurice Linford Gwyer* (Madras Library Association Publications, 9), Madras Library Association; E. Goldston, 1940-1941, pp.129-135.

6 Ibid., p.7.

7 S.R. Ranganathan, *Classification and Communication*, Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 1951, p.139.

8 Auroville, *Census - Auroville population January 2018*. <https://www.auroville.org/contents/3329> (accessed 2018-01-08).

4.3 ラマヌジャンに関わる施設

シュリニヴァサ・ラマヌジャンとは、1887年産まれ、タミルナドゥ州クンバコナム出身の数学者である。幼い頃から優秀で、大学では特に数学を熱心に学んだ。しかし他の科目で落第し、大学を中退する。その後、商社の会計事務をしながら、その合間に独学で数学の研究を継続する。

その後、ケンブリッジ大学のハーディ教授 (Godfrey Harold Hardy, 1877-1947) にその才能を見抜かれ、イギリスに招聘される。しかしイギリスの生活になじまず、病を得てインドに帰り、1920年に32歳という若さで夭逝する。短い生涯の間、ラマヌジャン予想など数々の天才的な業績をあげ、後世に残した。

(1) ラマヌジャンとランガナタンの関わり

ランガナタンは専攻が数学であり、郷里に近いこのラマヌジャンを数学者としても郷里の先輩としても、非常に尊敬していたようである。マドラスで高等教育を受けイギリスに留学した点が共通し、ランガナタンよりも5歳年上の先輩ということから、ラマヌジャンに対する畏敬の度と親近感が高かったようである。ランガナタンの著作の中に、ラマヌジャンの伝記⁹があるのは、数多くの図書館学関係の著作を残したランガナタンにしては、異質の業績である。

(2) サストラ大学シュリニヴァサ・ラマヌジャン・センター (Sastra Deemed University, Srinivasa Ramanujan Centre) (クンバコナム)

タミルナドゥ州中央部にキャンパスが複数あるサストラ大学は、私立大学でインド政府からいわゆる「みなし大学 (deemed university)」とされる学校である。この大学のシュリニヴァサ・ラマヌジャン・センターは、ラマヌジャンの生誕地であるクンバコナムに位置する。センターには、土木工学、機械工学、電気・電子工学、電気通信工学、コンピュータ工学、商学・経営学、数学、物理学、化学・生物学、英語学といったコースがある。



写真 11 サストラ大学シュリニヴァサ・ラマヌジャン・センター

校舎は、2004年に建築された比較的新しい建物で、インド風の外観の校舎には、中央に吹き抜けの螺旋階段があり、大変魅力的な建築である。また構内の一面には、ラマヌジャンの顕彰施設がある。

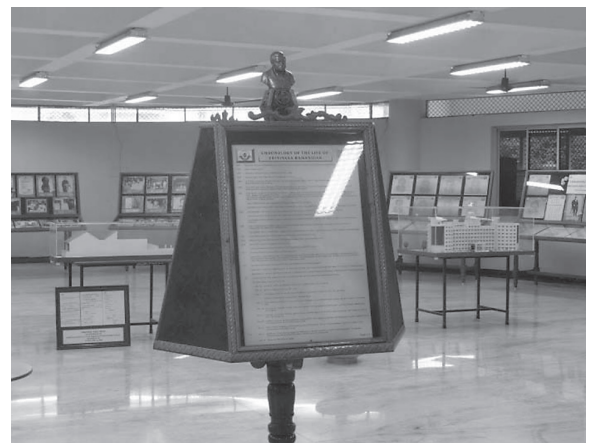


写真 12 シュリニヴァサ・ラマヌジャン顕彰展示室

この大学は、1年に1度、SASTRA ラマヌジャン賞を提供する大学でもある。この賞は、ラマヌジャンの専門とした分野で、顕著な活躍をした32歳以下の若手数学者に与えられる。2017年度はスイスの Maryna Viazovska 氏が受賞した。筆者は、このラマヌジャンを顕彰する展示室と大学図書館に訪問した。

ラマヌジャンの顕彰展示室は、校舎1階の最右翼に位置している。ラマヌジャンの一生の解説と、数々の業績や受賞に関連するものが展示されていた。図書館については、後ほどの節で報告する。

9 S.R. Ranganathan, *Ramanujan : the man and the mathematician*, Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 1967, 138 p.

5. インドの図書館

続いて本節では、前節では紹介し尽くせなかった訪問した図書館を紹介する。

5.1 大学図書館

(1) インド工科大学マドラス校中央図書館 (Indian Institute of Technology Madras Central Library) (チェンナイ)

インド工科大学は、インドで最難関である政府直轄の国立高等教育機関であり、全国に16校がある。このマドラス校は、そのチェンナイ・キャンパスである。知識組織化・図書館・情報管理国際学会において、初日午後のプレセッションで当図書館が会場で使われたため、見学がなかった。

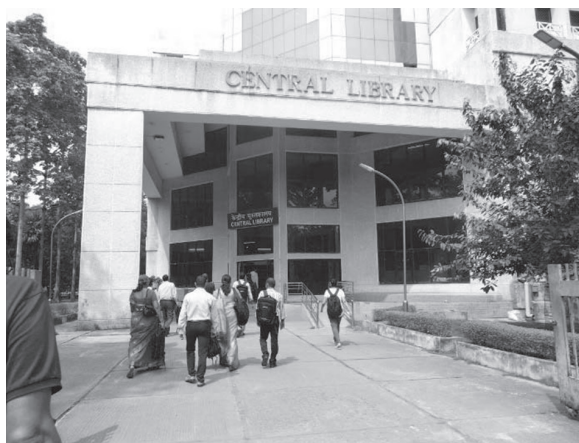


写真13 インド工科大学マドラス校中央図書館入口

このマドラス校はドイツの援助の下1959年に開学し、現在は550名の教員、8千人の学生、1,250名のスタッフを抱える規模である。中央図書館も開学時に開館した。当時、土木工学部の中に位置していたが、1965年に独立の図書館棟が完成して移転した。その後、2000年～2005年にかけて現在の中央図書館が建築された。蔵書数は200万冊で、大学の性格上、理工系の洋書が中心である。蔵書には、RFIDを導入している。

インド屈指の名門校ということもあり、学生は熱心に勉強していた。開館時間も平日は、8:00～24:00で当館よりも長い。(土日は、17:30に閉館する。) 筆者は、この図書館の4階にある参考図書室にて行われた、プレセッションのプログラムの一つであるグループワークに参加した。しかしこの図書館の設備は従来型であり、参考図書を大きな固定机で静謐に読む環境であっ

たため、いわゆるアクティブラーニング型の活動には無理があると感じた。



写真14 インド工科大学マドラス校中央図書館閲覧室

また館内も同じく従来型の完成形の図書館として充実しており、コモنز的な空間を改修で入れていくには少々クリアすべき課題が多いのではないかと感じた。

(2) サストラ大学クンバコナム校 Dr.S. Radhakrishnan 図書館 (Sastra Deemed University, SRC, Dr.S. Radhakrishnan Library) (クンバコナム)

この学校の図書館である Dr.S. Radhakrishnan 図書館は、校舎の4階の最左翼に位置している。図書館が校舎の中央部には位置していないこと、加えて独立の建物ではなく校舎内の一室であることから、日本でいうところのいわゆる学校図書館のような雰囲気であった。



写真15 サストラ大学シュリニヴァサ・ラマヌジャン・センター Dr.S. Radhakrishnan 図書館

蔵書数は約2万8千冊で、日本における高等学校の学校図書館と同じ程度¹⁰の図書館である。蔵書構成は、ラマヌジャン・センターの専門に合わせて、数学をはじめとする理工系図書が中心であるほか、経営学や教育学といった社会科学分野の図書も所蔵している。

(3) サストラ大学 Saraswathi Sadan 中央図書館 (Sastra Deemed University, the Central Library) (タンジャヴール)
サストラ大学とは、Shanmugha Arts, Science, Technology & Research Academy の頭文字を取ったもので、1984年に開学した。化学・生命科学、土木工学、コンピュータ工学、電気・電子工学、人文科学、経営学、機械工学、法学などといった各種専攻を持つ総合大学である。

タンジャヴールにあるサストラ大学の中央図書館にも訪問した。当館の建物は2003年に開館したもので、3階建のスペースに蔵書数約10万冊を所蔵する。

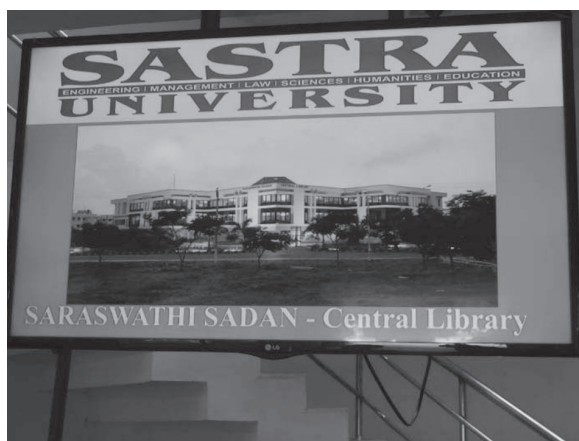


写真16 サストラ大学中央図書館

館内は非常に余裕がある作りであるほか、自然光を取り入れてまぶし過ぎない程度に、館内を明るくしていた。特に印象深いのが、スペースに余裕があることである。閲覧席が多く用意されている割には、お互いの間隔が大きいので、圧迫感は全くない。いずれアクティブラーニングの概念のもと、スペースやゾーニングの見直しが図られる時がもし来た場合、今回見た大学図書館の中で、転換が一番容易であると思った。



写真17 サストラ大学中央図書館 閲覧室

(4) インド経営大学院大学バンガロール校中央図書館 (Indian Institute of Management Bangalore, Central Library) (バンガロール)

インド経営大学院大学は、インド政府直轄の国立大学であり、インド工科大学と同レベルの社会科学を専攻する難関校である。MBAを取得できるコースのほか、多彩な専攻を有する。このインド経営大学院大学は、インド全国に6校あり、訪問したバンガロール校は、その中でも屈指の存在である。このキャンパスは、1973年に開学し、現在は約100名の教員が教え、約1,200人の学生が学ぶコンパクトな大学である。このキャンパスの中央図書館に、訪問した。



写真18 インド経営大学院大学バンガロール校中央図書館

10 全国学校図書館協議会、「2017年度学校図書館調査」の結果、<http://www.j-sla.or.jp/material/research/2008-2.html> (参照 2018-01-08)。

1992年に開館した地上3階建の図書館は、東北大学附属図書館本館の1号館と同じコンクリート打ちっばなしの建物で、中央部のメインカウンターの上は天井まで吹き抜けである。東北大学附属図書館本館と同じようにこの建物は、所々に自然光を取り入れる仕組みがあり、館内の雰囲気は似ている。ただ、この図書館だけがコンクリート打ちっばなしである訳ではなく、キャンパスの他の建物も同様なので、同時期に統一的にこのような仕様になったと考える。

蔵書数は、図書・雑誌全ての合計が20万9千冊で、主に経営学や経済学の学術書、学術雑誌が中心である。この図書館もスペースに余裕がある構造で、アクティブラーニングの潮流の波が訪れても、容易に内装の換装が可能なのではないかと思われた。



写真19 映画「きっとうまくいく」のワンシーン

筆者が訪れた日は奇しくも、前日に日本国駐インド大使平松賢司氏が訪問した翌日であったので、歓迎ムードの名残があるほか、珍しくも日本人が続けてやってきた、との感想を先方の図書館員から頂いた。

なお当キャンパス及び図書館は、2009年の大ヒットインド映画「きっとうまくいく(原題: 3 idiots)」の撮影地となっており、当館で撮影されたシーンもある。

5.2 公共図書館

(1) コネマラ公共図書館 (Connemara Public Library) (新館) (チェンナイ)

チェンナイに古くからあるコネマラ図書館(前述)の新館は、1973年に建築された。4階建の建物は、自由に入館が可能である。

児童書コーナー、参考図書コーナー等様々なブロックがある。蔵書数は、全体で約82万冊である。

館内は冷房がある部屋と無い部屋があるほか、高温多湿な環境の下、衛生上問題があるのではないかという箇所もあり、痛みも激しい蔵書も多く所蔵していた。しかし、少なくない利用者は、熱心に学習や読書に励

んでいた。



写真20 コネマラ公共図書館(新館)

(2) アナ・センテナリ図書館 (Anna Centenary Library) (チェンナイ)

タミルナドゥ州によって建てられた、アジア最大級の公共図書館である。タミルナドゥ州のかつての首相であったC.N. Annadurai(1909-1969)の102歳の誕生日を記念し、2010年9月15日に開館した。

蔵書数はこれまでの図書館と比較して圧倒的に多く120万冊であり、館内のスペースは冷房が全フロアにあり、清潔感と静謐さが保たれていた。また書棚や閲覧席も余裕あるスペースであった。インドで訪問見学した図書館(大学や公共など全ての図書館)の中で、最も洗練された現代的な図書館である。本学国際文化研究科山下博司教授が、知人で本図書館の開館に当たった州の学校教育大臣(当時)タンガム・テンナラス氏から直接聞いた話では、近代的なシンガポール国立図書館(National Library, Singapore 2005年落成)をモデルに、シンガポール側と相互訪問や意見交換を繰り返しながら設計したとのことである。



写真21 アナ・センテナリ図書館

地上9階建の巨大な図書館の中には、児童コーナーをはじめ、点字図書部門や一般閲覧室、雑誌・新聞コーナーそして主題分野ごとのフロアがあり、最上階は電子リソースの利用者スペースであった。館内には1,250の利用者用席が用意されている。またこの州の言語であるタミル語典籍の収集・保存にも力を入れており、専門のセクションがある。

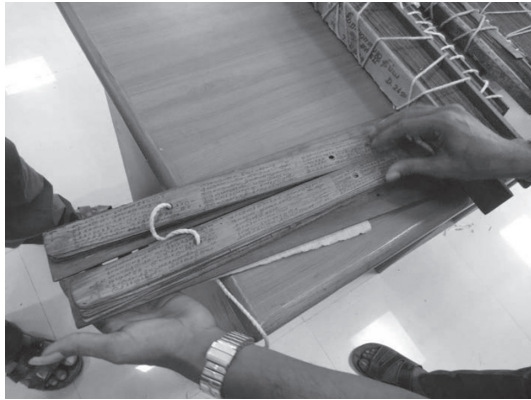


写真 22 タミル語典籍

入館にあたっては、鞆をエントランス外の建物に預け、玄関の警備員の警備を通して入館する。前述のコネマラ公共図書館と比べてセキュリティに関するチェックが、厳しい。

5.3 その他の図書館

大学でもなく公共でもない、特徴的な図書館への訪問が叶ったので最後に報告する。

(1) ロージャ・ムティア研究図書館 (Roja Muthiah Research Library) (チェンナイ)

南インドのタミル語資料を中心に、30万点を所蔵する研究図書館である。Roja Muthiah Chettiyar氏が集めた資料を基に、1994年に開館した。研究図書館ということで資料保存及びレファレンス・サービスに力を入れている。



写真 23 ロージャ・ムティア研究図書館

所蔵する資料は、18世紀以降の古典資料を多く所蔵するので、館内の修理製本部門が活発な作業、特に紙の裏打ちによる補強作業や、再製本を行っていたのが印象的であった。

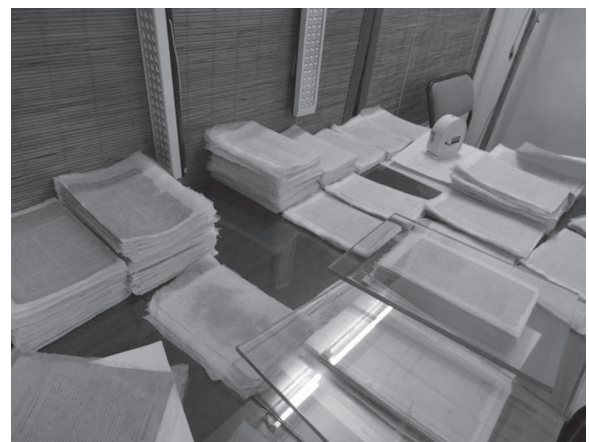


写真 24 修理製本中のタミル語典籍

(2) オーロヴィル図書館 (Auroville Library) (ポンディシェリ)

人工都市オーロヴィルにある19の公共図書館の中央館として位置づけられているこのオーロヴィル図書館は、2010年に建てられた。



写真25 オーロヴィル図書館

ここには3万冊程度の蔵書があり、英語を中心として、フランス語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語、オランダ語、ロシア語、そしてタミル語の図書を所蔵している。世界中の人々が人種や国家を超えて集まる都市なだけにあり、実際、館内を案内してくれたのはドイツ出身の司書であった。予算が僅少であるため、蔵書のほとんどは、寄贈で成り立っている。日本語の図書も寄贈は大歓迎であるとのことである。



写真26 オーロビンドとマザーの著作の別置分類

分類はデューイ十進分類 (DDC) で行われている。DDCの宗教の分類は、キリスト教を背景とする分類概念であるため、キリスト教の分類は細かい。しかしその結果、最後の290という番号の「その他の宗教」というカテゴリーにインドの様々な宗教を分類することとなり、大変不便であるとのことだった。また、この人工都市の背景思想に当たるオーロビンドとマザーの著作や研究書は、「宗教書」というカテゴリーとは捉えられておらず¹¹、別置されている。

6. おわりに

5年前インドを訪問した際には、高等教育機関の図書館を中心に訪問した。ランガナタンに關係する図書館や機関は、終焉の地であるバンガロールにあるものを一日のみ駆け足で見ると留まった。

しかし今回は、青年期から壮年期まで活躍したチェンナイの各図書館や機関を訪問することができたのみならず、生誕地の出身学校を訪問し、ランガナタンを顕彰する学校図書館をこの眼で確認することができた。特にここに至り見聞きした者は、日本の図書館界では筆者のみである、という自負がある。そして終焉の地バンガロールでは、この5年間の動きを知ることができた。

またインドの図書館という意味では、前回に続き高等教育機関の図書館はもちろん、公共図書館や専門図

書館、学校図書館や宗教を背景とする図書館といった多種多様なインドの図書館を訪問することができた。引き続き様々な切り口で、調査結果を発信して行くほか、今回コンタクトを取る事ができた諸外国の関係者と連絡を取り合い、今後の業務や活動に大いに活かして行きたいと考えている。

以上、今回のインド渡航は、従前から疑問に思っていたこと、不明だったことの多くが解明され、大変良い機会となった。また前回は、図書館大会でこちらが一方的にインド人の話を聴く側であったが、自らの考えや当館の施設のことをまとめ、諸外国の関係者に訴える機会を持てたことは、非常に貴重な機会であった。また当館の威容や蔵書数、そして設備はインド人の図書館関係者

11 つまり宗教として客観的に見るのではなく、この街全体を貫く根源思想として捉えられていることが特徴的である。

にプロモーションビデオを通して、どよめきを起こさせる結果となり、あらためて自らが奉職する職場に対する誇りと敬意を高める結果となった。平成 29 年度東北大学附属図書館における研究振興プログラムに採択して頂いた、当館管理職の皆さまに厚く御礼申し上げるとともに、今後大きな視点では業界に、小さい視点では毎日の活動に、良い成果を出して行くことで、恩返しをして行きたいとあらためて感じている。

最後に、当プログラムを完遂するにあたり、及び、本稿を書くにあたり以下の皆様にお大変お世話になりました。この場を借りて心から御礼申し上げます。

阿部恵美子様（東北大学大学院文学研究科）、上野美香様（同附属図書館）、及川啓子様（同附属図書館）、大友美里様、加藤晃一部長（東北大学附属図書館）、加藤信哉特任教授（国際教養大学中嶋記念図書館館長）、川

面ゆき准教授（東北大学高度教養教育・学生支援機構）、菊地良直係長（同附属図書館）、佐々木亜紀子様（同）、佐々木智穂係長（同）、嶋田みのり助教（東北学院大学）、田中清美様（Soka Ikeda College of Arts & Science for Women）、中里早希様（東北大学文学部）、山下博司教授（同大学院国際文化研究科）、西村美雪様（同附属図書館）、村上康子課長（同附属図書館）、吉植啓子様、吉植澄子様

I express special thanks to Davide Bitti (Tohoku University Graduated School of Art&Letters and International Concierge of our Library), Dr. Francis Jayakanth (IISc, JRD Tata Memorial Library), Mr. Prasanna Seshadri, John Augeri (Deputy Director of Paris Île-de-France Digital University) for valuable information and their supports.

